

## 第 28 回世界牛病学会の概要と第 30 回世界牛病学会 (2018 年) 日本招致決定の報告

中尾敏彦<sup>†</sup> (日本産業動物獣医学会会長・第 30 回世界牛病学会札幌招致委員会委員長)



世界牛病学会 (WAB : World Association for Buiatrics) が主催する第 28 回 世界牛病学会 (WBC : World Buiatrics Congress) が、7 月 27 日から 31 日までの 5 日間、オーストラリア北部の観光地として日本人にも人気の高いケアンズで開催された。

オーストラリアでの世界牛病学会は、1998 年のシドニーでの学会に続いて 2 回目であったが、今回は、いつもに比べて参加者が少なく、内容も低調であった。その理由は、地理的に欧米から遠いことと、学会の目玉ともいえる基調講演に第一線の研究者が招聘されておらず、魅力あるプログラムが用意されていなかったこと、さらに、参加登録料が、事前の早期割引でも約 13 万円と、極端に高かったことなどによるものと思われる。それでも、地元オーストラリアの牛獣医師会 (Australian Cattle Veterinarians) の懸命な努力で、どうにか 5 日間の学術プログラムと歓迎レセプション及び晩餐会などの行事を終え、1960 年から積み重ねられてきた世界牛病学会の歴史に新たな 1 ページが加えられた。また、今回の学会では、4 年後の 2018 年に開催の第 30 回世界牛病学会の開催都市の選考が行われ、4 つの候補都市の中から、札幌が選ばれた。そこで、ここでは、ケアンズでの世界牛病学会の概要とともに、2018 年世界牛病学会札幌招致決定の経過について報告することとしたい。

### 1 第 28 回 世界牛病学会の概要

参加者数は、53 カ国からの 974 名で、当然ながら、オーストラリアとニュージーランドからの参加が多かった。アジアでは、日本からの 43 名、中国からの 40 名、韓国からの 15 名が主であった。中国からは今回特に参加者が多かったが、世話役を務める、中国農科大学獣医学部獣医内科学の Bo Han 教授の話では、中国では、数千から数万頭の大規模酪農が出現していて、乳房炎や繁殖障害が大きな問題になっており、その対策が急務と

なっているとのこと。今回の学会の際に、何人かの専門家を招いて、中国人獣医師向けの乳房炎セミナーを開いたとのことであった。

学術プログラムは、基調講演が 58 題、口頭発表が 299 題、ポスター発表が 229 題。日本からは、口頭発表が 12 題、ポスター発表が 17 題であった。口頭の発表者は、Urushizaki, S. (宮崎大学), Yamagishi, N. (岩手大学), Tsuka, T. (鳥取大学) (3 題), Fushimi, Y. (山口大学連合大学院, シェファードセントラルライブストッククリニック鹿児島), Yoshida, C. (新潟大学), Nakao, T. (元山口大学), Iso, H. (磯動物クリニック), Tajima, M. (酪農学園大学), Takagi, M. (鹿児島大学), Ito, T. (京都微研) で、それぞれ、立派に発表が行われた。なかでも、磯らの発表は、第四胃左方変位の整復における腹腔内視鏡手術の効果を、他の方法と比較したもので、その前に発表されたドイツハノーバー獣医科大学牛病クリニックの 200 例、オーストラリアの開業グループの 73 例に比べて、641 例という多数の症例を用いたもので、内容及びスライドの構成もよく、高い関心を集めた (図 1)。ポスターによる発表者は、Kimura, A. (岩手大学), Higuchi, H. (酪農学園大学), Kushibiki, S. (畜産草地研究所), Matsuda, K. (宮城 NOSAI), Mita, A.



図 1 講演中の磯 日出夫院長 (磯動物病院)

<sup>†</sup> 連絡責任者：中尾敏彦 (日本産業動物獣医学会)

〒 067-0003 江別市緑町東 3-111-31

☎・FAX 011-398-6705 E-mail : rakunonakao@kyp.biglobe.ne.jp



図2 WBC 2014 組織委員長の Dr. Rheinberger と夫人

(家畜改良センター), Sato, S. (岩手大学), Tajima, M. (酪農学園大学), Gondaira, S. (酪農学園大学), Hayashi, T. (動衛研), Izumi, T. (十勝 NOSAI), Kiku, Y. (動衛研), Kohara, J. (北海道総合研究機構), Okamoto, K. (曾於 NOSAI), Sato, R. (麻布大学), Shiba, Y. (東海大学), Takagi, M. (鹿児島大学), Yurita, M. (東海大学) であった。今回は、演題の申し込み数が少なかったため、口頭発表が多くなり、相対的に、ポスター数が少なく、プログラム上も、ポスターを見るための時間が十分に確保されていなかった。

学会1日目の開会式では、世界牛病学会(WAB)会長の Baumgartner のあいさつ、本学会組織委員長の Rheinberger による組織委員会メンバーの詳しい紹介が行われたのち、アトラクションとして、アポリジニのダンスが披露された。最後に、Rheinberger 委員長の夫人とお嬢さんの二人の美しい歌がオーストラリアの豊かな自然の風景をバックに会場に響き渡り、しばし、別世界にいざなわれるようだった。二人とも声楽の練習を本格的にされているとのことであった(図2)。開会式後のレセプションでは、飼育員に抱きかかえられたコアラやワニが登場し、参加者との記念撮影に応じていた。

学会第3日目には、理事と加盟国代表の参加のもとで、WAB 総会 (General Assembly) が開かれた。冒頭で Baumgartner 会長のあいさつがあり、学会参加者がこの時点で997名に達したことが紹介された。続いて、Szenci 事務局長から、前回の第27回学会(リスボン)以降2年間の活動報告と会計報告があった。重要な点は、WABの規約の改正が行われ、これまで特に決まらなかった理事や会長の再任規定が決められたことであろう。その他の議事のところで、日本の加盟組織の代表として出席していた筆者から、WBCにおける同時通訳に関する規約の見直し検討の提案を行った。WBCでは、英語からフランス語、ドイツ語、スペイン語への同時通訳を少なくとも3会場で行うことが義務付けられている

が、実際にどの程度の参加者が同時通訳を利用しているかが明らかでなかった。ケアンズでの学会でも、学会場で同時通訳用のイヤフォンを使っている人を殆ど見かけなかった。Baumgartner 会長からも、前日にイヤフォンの貸出数を確認したところ28台に過ぎなかったことが紹介され、前回のリスボン大会での利用状況等も調べた上で、検討したいとの意向が示された。

学会最終日に閉会式が行われ、ケアンズ大会の組織委員長 Rheinberger から、組織委員会、コンベンション会社、WAB、コンベンションセンター及び学生ボランティアへの謝辞とともに、学会の準備を振り返っての苦労話なども披露された。最後に、次回の WBC 2016 Dublin の組織委員会からプロモーションのプレゼンが行われた。

## 2 WBC 2018 札幌招致の決定

1960 から1年おきに開催されてきた WBC に日本からの参加が始まったのは、1976年からで、1988年以降は、毎回、おおよそ30名から60名が参加している。一番多かったのは、2002年のドイツハノーバーでの学会で、70名近くが参加した。また、WABの運営組織である理事会に、1982年以降アジア地区代表の理事(浜名克己2期8年、中尾敏彦3期12年、田島誉士1期目)を出している。1990年代の終わり頃から、日本産業動物獣医学会関係者の間で WBC 日本誘致の機運が高まり、北海道獣医師会ならびに札幌コンベンションビュローの協力のもとで、日本産業動物獣医学会主催、開催都市札幌で WBC 2004 を日本に招致する計画がまとまり、日本獣医師会理事会での承認を経て、2000年4月に正式に立候補した。その年の秋にウルグアイで開催された WBC 2000 で、立候補国(日本とカナダ)によるプレゼンが行われ、その後の理事会で投票の結果、前回に続いて2回目の立候補となったカナダが開催国に決まった。

その後、2010年頃になって、WBC にほぼ毎回参加している指導的な臨床獣医師の間で、WBC を日本に招致しようという機運が再び生まれてきた。候補地を再び札幌とし、地元北海道獣医師会の協力も得られることになり、日本産業動物獣医学会及び同学会世界牛病部会が中心になって、WBC 2018 招致計画をまとめ、日本獣医師会学会幹事会ならびに日本獣医師会理事会の承認を経て、今年4月に立候補に至った。今回は、日本の他、メキシコ、スペイン及び南アフリカが立候補した。日本は、2000年の立候補後2回目、メキシコとスペインは、2012年に続いて2回目、南アフリカは初めての立候補であった。WBC 2018 の開催国は、今回のケアンズでの学会の理事会で決定されることになっており、理事会に先立って、各立候補国による10分間のプレゼンが行

われた。日本からのプレゼンは、札幌コンベンションセンター、札幌市コンベンションビュロー及びWAB理事の田島教授の協力のもとで、スライドを作成し、入念なリハーサルにより、準備が行われた。当日のプレゼンは、多くの理事に顔を知られている筆者が担当した。プレゼン後の質疑応答では、登録料、札幌市内のホテルから会場までの距離、外国からの新千歳空港へのアクセス、日本国内からの参加者予想数、牧場視察の可能性、アジア初のWBCとなることについて他のアジア諸国との連携は進められているのか等々の質問があった。4カ国のプレゼンの後に開かれた理事会における選考結果は、間もなく、Baumgartner会長から、各国の代表に伝えられ、翌日の総会でも、Szenci事務局長から報告された。日本が選考された主な理由として、あらかじめ提出された招致計画書に加え、関係省庁、自治体、関係団体・学会、大学、企業からの多くの招致支援レター（特に今回は国際学会関連では初めてという農林水産大臣からのレターをいただいた）、さらにプレゼンの内容が最も優れていたことが挙げられた。もちろんその背景には、毎回多くの参加者があり、理事会のメンバーでもある日本で、そろそろ世界牛病学会を開催してもよいのではないかという思いが多くの理事の間にあったものと思われる。

プレゼンの開始前、会場前には、日本からの多くの参加者の方々が来られたが、理事と立候補国の代表しか入

場できず、会場の入り口の前に待機して応援の意思を示された。

日本開催決定の報が伝わると多くの方々からお祝いの言葉をいただき、喜びを分かち合うことができた。

WBC 2018の日本招致が決定されたことは、同時に、世界の牛病関係者に、期待に応えうような立派な学会を開催することを約束したことを意味する。開催決定当日、WBC 2010 サンチャゴ大会の組織委員長で、現WAB副会長のDr. Pooから、「開催決定の万歳はここまで。これからは、汗をかいて、大変な準備作業を進めなければならない」という助言があった。経験者だけに実感がこもっていた。学会理事のベルリン大学Muller教授からは、さっそく、10月初めに400人くらい集まるドイツ牛臨床獣医学会がベルリンで開催されるので、WBC 2018札幌開催のことを報告したい。その資料として、今回のプレゼンのパワーポイントファイルを使用したいとの申し出があった。

次の第29回WBCは、アイルランドのダブリンで、2016年7月3日から7日までの日程で開催される。講演要旨の受け付けは来年9月頃からの予定である。アイルランドでは、2020年までに、牛乳・乳製品の生産を50%、そして、牛肉の生産を40%アップさせることを国の政策に掲げ、牛産業の一層の振興が図られており、牛の獣医学に関する研究や普及の進んでいる国として知られる。充実した内容のWBCが期待される。